令和6年度 第3回 小平市文化財保護審議会 会議録

日 時 : 令和6年11月8日(金) 午後1時30分～午後4時

場 所 : 小平市役所 503 会議室

出席者 : 小平市文化財保護審議会委員 会長、副会長、委員5名
事務局 文化スポーツ課長、文化財担当係長、主事

傍聴者 : 0名

1 課長挨拶

【事務局】 めっきり寒くなって参りましたが、お集まりいただきありがとうございます。文化祭シーズンになってまいりましたが、来週の16日17日に小平郷土研究会が、中央公民館で展示を行います。小平の屋号についての展示と、すいとんを食べることができます。10時から17時、日曜日は16時、実食会は11時からということで、是非足をお運びください。明日あさっては、市役所の駐車場の方で産業祭が行われます。では令和6年度第4回文化財保護審議会を開催します。よろしくお願いいたします。

2 会長挨拶

【会長】 急に寒くなり秋が短くなったと感じる。まさに展覧会のシーズンになり、郷土史研究会の日頃の研究などを見に行かれると良いのでないか。また審議会で見に行った民具庫にあるものなども、知ってもらえる機会があれば良いと思う。

3 報告事項

(1) 国史跡鈴木遺跡保存活用事業について

【事務局】 小平市国史跡鈴木遺跡整備基本計画検討委員会の委員構成が決定いたしました。整備基本計画の策定にあたりましては、文化庁から有識者委員会からの意見をいただきながら進めるよう指導がございましたので、史跡整備の専門家の先生方に打診して選出いたしました。

文化庁の求める有識者委員ですが、鈴木遺跡は旧石器時代の遺跡ですので、旧石器時代の専門家が必要です。佐藤宏之先生は東京大学の名誉教授で旧石器時代を専門とされており、日本旧石器考古学会の会長を務められ、他の旧石器時代の整備にも関わられております。鈴木遺跡の保存活用計画検討委員会の委員長にも就任していただいていた方です。

二人目は長崎潤一先生で、同じく旧石器の考古学が専門で早稲田大学の文学部の教

授です。この方は鈴木遺跡の国史跡指定の際にいろいろご助言をいただいた方で、小平市としては10年来のお付き合いとなります。以上、旧石器時代の専門家が2名になります。

史跡整備では、縄文時代の大集落遺跡である青森県三内丸山遺跡とか、弥生時代のクニがまるまる遺存していた佐賀県吉野ヶ里遺跡のような、その遺跡のあった時代の景観を再現する整備がよく行われます。そこで、景観デザインを専門とする千葉工業大学工業デザイン学科の八馬智先生に入ってくださいました。この方は、佐藤先生と一緒に、旧石器時代の国史跡である千葉県酒々井町の墨古沢遺跡整備計画の検討委員会に加わり、酒々井町教育委員会に指導助言されたご経験があります。

次に、旧石器時代は現在と気候が違いますので、整備では当時の植生の復元なども行いたいと考えています。具体的には、旧石器時代は氷河期と言われる時代で、今の日本の景観ですと、もっとも近くで日光の戦場ヶ原、北海道の北半部や、シベリアのような針葉樹を中心とした景観が広がっていました。そこで遺跡から読み取れる過去の時代の植生を研究している明治大学黒曜石研究センターの能城修一先生に、今回委員にご加入いただきました。

それから、史跡整備は土木工事でもありますので、土木工学の専門家として中央大学理工学部環境学科の西岡英俊先生に入ってくださいています。西岡先生は地盤工学がご専門で、特に農林中央金庫の敷地の北側には昭和期につくられた古い擁壁がありますので、それをどうしていくのかという課題があり、文化庁から委員に土木工学の専門家を入れてくださいという指示がありましたので、ご加入いただきました。

また史跡整備は小平市のまちづくりの一つでもあるので、東京経済大学の法学部教授で副学長の、専門が都市計画・まちづくりの羽貝正美先生に委員にご加入していただきました。羽貝先生は小平市の都市計画審議会の委員も務めていただいております。

ここまでが専門委員で、これが文化庁から指定があった各専門分野の6人です。このほかに、有識者の委員の方と公募の委員が入っています。

有識者委員については、国史跡は小平市の文化財の一つでもございますので、小平市の文化財保護審議委員の副会長に、委員にご就任いただきました。これは、前回の審議会をお願いいたしましたと存じます。

また鈴木遺跡は、鈴木小学校を建てる時に発見された遺跡でございます。国史跡は、来場者に史跡の時代を理解していただくという目的で整備しますので、教育上の配慮から教育関係者に委員に参加していただくということが、他の史跡整備でもよくありますことから、鈴木小学校の細萱校長先生にご加入いただきました。

それから、最近では史跡を活用した観光振興も増えており、観光関係者の方にも委員になっていただくケースが増えていきます。そこで事務局からこだいら観光まちづくり協会の事務局長に打診したところ、観光協会の栗山丈弘代表理事を推薦していただきました。この方は文化学園大学の国際文化観光学科の准教授で、小平市内に在住で市内のこともよくご存じです。以上3名が有識者委員です。

また、近年の史跡整備では地域住民の代表の方も入っていることから、整備予定地の保存管理等用地に隣接する武蔵野団地自治会の新会長に入ってくださいました。こ
こまでで合計10人です。

公募委員は2名になります。公募委員につきましては、応募にあたり「私の考える
鈴木遺跡の後期旧石器時代の史跡整備」という題で作文を出していただき審査して決
定いたしました。募集は令和6年7月の後半から開始し、8月下旬に審査会を行いま
した。応募総数8名に対して、2名が選出され、野中さんと依田さんという方が選ば
れました。お二人とも小平在住です。

文化庁からは委員について、おおむね良いとの回答が得られたことから、委員構成
を決定させていただきました。この委員の皆様から意見を出していただいて、整備計
画の内容を具体化していくということになります。

今後の計画策定のスケジュールですが、第1回の委員会を12月25日に開催予定で
す。史跡整備の課題整理などについて議論をする予定です。

第2回は令和7年3月ごろに開催し、令和7年の5月に地域懇談会、分かりやすく
いうと計画内容についての住民説明会を行います。6月に第3回の検討委員会9月に
第4回の検討委員会を行い、懇談会の内容などを踏まえて計画の素案をつくりまし
て、その後市民の意見公募、パブリックコメント、令和8年の1月ごろに最後の検討
委員会で最終案の確認をして、令和8年の3月に完成を目指したいというようなスケ
ジュールでございます。検討委員の皆様のご検討の流れの中からもう1回ぐらい必要と
いう意見があった場合は対応することも視野にいれています

現在の所は第1回の検討委員会開催に向けて、史跡整備に関わる課題整理を事務局
で進めています。鈴木遺跡の整備についてのことについては以上になります。

また鈴木遺跡に関わるイベントをいろいろ行っていますが、それについては次に報
告いたします。

【会 長】 有識者は小平市で選定されたということか。

【事務局】 有識者選定にあたっては、他の自治体で行われた史跡整備委員会の委員構成を参考
にいたしました。小平市では文化財保護審議会委員、教育関係者、観光関係者といた
しました。

【会 長】 それに公募市民の方が加わる。

【委 員】 史跡の整備基本計画というのは、最後にどういったものができるのか。市民の目に
見えるようなものとしては、どういったものになるのか。

【事務局】 建築設計で例えますと建築イメージ図ですね。史跡整備イメージのスケッチを作り
ます。計画案は最終的に、整備した時にどういう感じになるのかをカラーでビジュア
ル化します。現在のところは模型までは作らない予定です。

【委 員】 そのための史跡整備検討委員会かと思う。

市民としても去年度の発掘見学会の時にかなりの人が来ていたこともあり、遺跡に
興味がある方に向けて、検討されたことが見せられるように具体化されるというこ
とか。

- 【事務局】 この計画については文化庁からの話を聞いて、整備内容を具体化することなので、整備にあたって方針をどうしようかということ文章で羅列したものではなく、どういった整備にするのかということ、最終的にビジュアルで表現し、掲載するよう言われています。
- 【会長】 こういうイメージについては公開されるのか。
- 【事務局】 完成した史跡整備計画は、基本的には印刷物として刊行され、このほか市のホームページに掲載されます。国史跡整備基本計画をインターネットで検索すると、他自治体の例を見ることができます。
- 【委員】 今は遺跡の話ですが、小平市のLINEに登録すると1日に5・6回とか多いときは10回以上も通知がはいてくる。SNSでなんでも発信することができますから、そういったところでも広報するのか。
- 【事務局】 「史跡整備計画ができました」という周知は、そのようにしたいと考えています。
- 【委員】 確かに「できました」になるだろう。途中についてはよいだろう。
- 【副会長】 保存活用計画にも図が載っていたが、あのような感じのものになるか。
- 【事務局】 鳥瞰図、図面だと平面図となんですけれども、鳥瞰図といって鳥が上空を飛んで地上を眺めたようなそのような図を作ることが基本的な課題となります。視覚イメージとして整備がこうなっていくというものを作ります。

(2) 文化財関係イベントについて

- 【事務局】 前回の文化財保護審議会以降に行われたイベントについてご報告します。
- 令和6年8月19日に、黒曜石で旧石器を作る石器製作体験イベントを実施いたしました。大人を含めて35名の申し込みがありましたが、今回はこどもの夏休み期間中でもありますので、こどもの体験を優先させていただくことにし、こどもが16名当選しました。当日は全員の方に参加していただき、鈴木遺跡の説明を行い、石器作りを体験していただきました。
- 10月5日には、鈴木遺跡では発掘調査が始まって今年で50年目ですので、それを記念して「旧石器時代の焼石調理と鈴木遺跡の生活」という内容で、文化財講演会を行いました。
- 会場は中央図書館3階の視聴覚室で、身延山大学非常勤講師の保坂康夫さんに講師をしていただきました。鈴木遺跡で大量に見つかっている礫群からどのようなことが分かるかということについて、自然科学的な分析が行われている保坂先生にお話しいただきました。鈴木遺跡の発掘では、石器だけではなく、その倍くらい礫が見つかりますが、加工されていない石として見られています。これから何が分かるのかというお話でした。その成果については、これから刊行物として公開されていくことになるのですが、調理したときに魚や動物の脂が残っているので、それを検出してこの地域で何が食べられていたのかということが分かるということ、礫の割れ方からどのような調理方法で使われていたということを分析されています。今回は70人の方と市長、教育長にも挨拶をいただきました。

10月12日には、旧小川家住宅玄関棟の前の三和土部分の修繕を行いました。

三和土の修繕工程には、土をたたいて固めるという作業があるのですが、これを市民の方に体験していただくイベントで、小平市の文化振興財団が実施しました。

三和土の体験用の道具は、この工事を請け負っている工務店がこの体験のために作ったもので、小学生も使えるように、また形については昔の通りにつくられています。叩く面に対して持ち手の棒は斜めについており、使いやすいようになっています。工務店の方は叩いているうちに柄が折れるのではないかと心配していたそうですが、そのようなこともなく実施できました。体験時間は1時間半くらいで、事前の打ち合わせでは途中で参加者が飽きてしまうのではないかと心配していましたが、飽きずに最後まで体験していただきました。

【委員】 三和土修繕作業体験会はなかなか面白い体験イベントだ。

【事務局】 なかなかできない体験でした。また道具は工務店が作ったもので、体験終了後は記念にお持ち帰りください、可能なら自宅の庭でもやってみてくださいということでした。

【委員】 微妙に柄が上がっている。

【副会長】 自身は当日参加して体験してきた。15分ほど体験してきたが大変疲れた。叩けば叩くほど固くなっていった。良い体験をさせてもらった。

【事務局】 今後もこのような機会があれば出来たらよいと思います。また募集ももっと長期間でできればよかったかと思います。

【委員】 叩けば叩くほど強くなるということだが、湿っても泥にならなくなるということか。

【事務局】 これについては、施工者によると物理的な変化ではなくて、化学的なイオン結合で固くなるというように聞いています。三和土の中にニガリが入っていて、塩化マグネシウムが力が加わることでかたまる、という現象が起きているそうです。

この工法は、もともと中国で万里の長城などを作った版築で、日本の古代のお寺がこの版築で壁を作っていて、それが庶民の家の中の平坦部でも使われるようになったということだともいます。委員のおっしゃる通り、雨でも泥んこにならないです。

今は最後の作業段階で、表面を養生している状態で、終わったところから解放しています。今月末くらいに入れるようになります。これをやっていただいた職人さんによると、学校の校庭などでも使われているそうで、コンクリートだと熱をため込んでしまうけれども、三和土だとそういうことは起きないそうです。

【副会長】 三和土には有機物が含まれていて、微生物とか土の中にいる生物の力を借りてやるので、自然に優しい。この土をもらって自身でも試してみたところ、一週間でセメント的な固さになっている。重量も80グラムが60グラムになっている。最初は臭かったが腐葉土のような化学変化を起こしてそうでなくなって、色も茶色からグレーになっている。これが自然の力なのだと思った。水の染み込みも良いので校庭にも向いていると聞いた。

【委員】 参加したのは小学生か。

【事務局】 小学生よりも大きそうな子もいました。保護者も参加していました。

【副会長】 当日の午後は、飛び入りで参加もできるようになっていた。

【事務局】 10月24日木曜日と25日金曜日に大沼公民館の地域支援講座で、鈴木遺跡に関する講演依頼があり、出前講師として解説してきました。

初日は大沼公民館で、座学で遺跡についての講義を行い、2日目は鈴木遺跡資料館で解説を行ったり、鈴木小学校の古代のオアシスを見て、石神井川の源流につながる水が湧いている状況を見学しました。内容については通常の鈴木遺跡の解説なのですが、鈴木遺跡を知ってもらうよい機会ですので、今回は是非とも協力しました。こちらについては委員にオブザーバーとしてご参加下さり、ありがとうございます。参加人数は18名でした。翌日は1名欠席で17名になりました。

来年1月に花小金井南公民館でも鈴木遺跡について講演します。

【事務局】 こだいら遺跡ウォークを10月26日に実施しました。

こちらは例年開催している事業ですが、今回はメールでも申し込みも可能ということにしました。郵便料金の値上がりの時期にもあたり、煩雑な時期だったことからか、メールでの申し込みが多かったです。定員が20名だったのですが、少し多めに当選ということにして、対応いたしました。20名を2グループに割って反対向きで行いました。市民向けの行事でしたが、この辺り歩いたことは無かったとか、坂の上り下りをしていただきました。

11月30日には、小金井サクラの名勝指定100周年を迎えるということから、小金井市と共催で、小金井サクラに関わる江戸時代の文化財を見てあるく「こだいら・こがねい文化財めぐり」を実施します。

定員20名に対して倍の申し込みがありました。鈴木遺跡資料館から海岸寺の桜樹碑、山門、そして行幸松、小金井橋を渡り、小金井市内の江戸時代の陣屋の痕跡を見ながら小金井市の文化財センター浴恩館まで、地図上の計算では3.5キロメートルの長さがあります。全行程は遺跡ウォークより長いです。

【副会長】 解散は小金井市文化財センター・浴恩館か。

【事務局】 その通りです。集合場所と解散場所が違います。応募人数が多かったので、ある程度需要があるとは考えています。

【会長】 来年行われる花小金井南公民館の講座のような、講師依頼の引き合いは多くあるのか。

【事務局】 毎年少なくとも1件はあります。基本的にそうした依頼は協力していく所存です。公民館で行われる事業は、公民館側で会場の確保と募集、周知をおこなってもらえる利点もあります。

【会長】 10月は集中的にイベントがあった。

【事務局】 この2024年（令和6年）は、鈴木遺跡が1974年に本格的な発掘調査が始まってから50周年という年で、文化財担当で実施する事業は鈴木遺跡に絡めて開催しています。本日この後、皆様に終わってから見ていただく鈴木遺跡発掘調査50周年記念のパネル展も開催中です。

あともう一つ、今年は小金井サクラもちょうど国名勝指定100周年です。そこで、小平市も何か記念イベントをしたいと検討しておりました。

小金井サクラに関連した文化財で、小平市域内にあるもので特に一番重要なものは、

海岸寺にある小金井桜樹碑です。どういう経緯で小金井サクラが玉川上水の脇に植えられたのかということや当時の当事者の子孫が記したものです。小金井サクラが有名になってくると、どういう経緯で玉川上水沿いにサクラが植えられたのかということについて、いろいろな人が勝手なことを言い始めたため、正しい経緯について当時の当事者の人から伝聞した内容を石碑にしたものです。

この石碑は、小金井サクラの植えられた年代を記した証拠として、現在の定説となっています。担当では関連文化財を巡るイベントの準備をすすめていたところ、小金井市の文化財係から共催の申し入れがあり、せっかくなら一緒にやりましょうということになりました。

【会 長】 来年も続けてほしい。鈴木遺跡 50 周年や小金井サクラ 100 周年も何か生かすとよい。確かに小金井市と協力体制を作れると良い。

【事務局】 小金井サクラは小平市で完結するわけではなく、小平市、小金井市、西東京市、武蔵野市に広がっています。

【会 長】 小金井サクラ範囲を全部歩くと大変である。鈴木遺跡資料館からスタートして、五日市街道を歩いていくということか。

【事務局】 鈴木遺跡資料館を集合場所にさせていただいて、ちょっと資料館を見ていただいて入館者数の増につなげたいという思いもあります。

【会 長】 三和土の話なども周知するというのが大事だ。どうやって周知するのかというのは重要で、例えば民具庫にあるものを展示するなど、それで展示活用できているということにもなる。一方で指定も増やすが、保存したものを展示しているということも大事だ。

【事務局】 ふるさと村で展示に使いたい民具を貸して欲しいという依頼があり、対応していません。

【会 長】 広報活動はふるさと村でやってもらえるから良い。

4 議題

(1) 小平市文化財指定候補の検討について

松明まわしについて

【事務局】 7月31日に松明まわしの視察を行いました。

当日は大雨でしたが、午後6時15分ごろに雨が止み、また雨が降るかもしれないため開始が早められ、6時20分くらいから始まりました。

松明は山門の所に配置し、着火用の火を山門の前に置かれた金属製の箱に用意し、松明まわしを行う範囲はロープで囲い、さらに脇には水を入れたバケツを用意しており、厳重に準備をされています。

松明に火をつけて頭の上ぐらいの所で回して、ある程度回すと、金属製の箱に納めます。その際に手を合わせたり、お辞儀をしたりされていますが、これについては決まった習慣は無いようです。ロープの外側にいても熱を感じるほどでした。

檀家さんからの談話では、小麦の品種改良で藁の丈が短くなり、松明を作りやすく

なってしまった。その分回していただける時間も短くなっているそうです。

松明は開催の一週間前に作られます。今井前副会長が2007年ころに描かれた絵があるのですが、かなり編み込まれているように思います。子ども向けの花火なども用意しており、人の集まる行事として実施されているということです。

ご住職のお話では、まずお墓の前で読経をし、それから松明回しを行う、とのことでした。今回は大雨のため、墓地の入り口で全体に対して行うという形でした。松明まわしが終わりますと、檀家の方々は松明の残り火を提灯に入れて持ち帰られておりました。提灯は配布されているものと、檀家ご自身で持ってくるものがあります。

【委員】 天気が良ければ周りに多くの人がいっぱいになる。

【委員】 すごい雨だった。

【副会長】 低くみえる、もっと高くで回す。

【事務局】 檀家さんにすすめられて、私たちも松明を回させてもらいました。実際に見たことがあるわけではないのですが、火の玉が漂っているように思えました。

【会長】 大きいようだが。

【委員】 65cmと47cmと書かれている。

【会長】 まわしてどのように納めるのか。

【事務局】 最終的には徐々にゆっくりしていき、おろしていました。

【委員】 檀家ということは、各お寺でこういうことをやっていたのか。

【会長】 違うのではないか。最初の松明まわしは各家でやっていたというから、お寺に集まってやるようになってからこのような方法になっているのではないか。

【委員】 持って帰った火をどのようにしているのか。

【副会長】 お仏壇にあげると聞いている。

【委員】 家に持ち帰って、その火を仏壇のろうそくに移してからのことも含めて、盆供養について調査しないといけない。

【委員】 各家庭が自分の敷地内で、回した火を家の仏壇に移していた。

【委員】 盆供養の3日間にその火をどうしていたのかということ、調べてあきらかにしないとなんとも言えない。

【会長】 盆供養という行事という全体があって、その中にある松明まわしということをとらえないと、全体の中での意味が見えてこないということか。

【委員】 そのとおり。

【委員】 持ち帰るようになる前には、各家庭で先祖の魂に対し自家はここだということを示すためにおこなっていたということか。

【委員】 その通り。小川寺では先祖の魂の墓からの追い出しのお経をあげている。墓地全体に600から700のお墓があり、日中からやって夕方までかかり、それから松明まわしになる。そのため山門の辺りに集まっているようだ。各家庭で松明があると喜んで帰っていくという話だった。各家庭が錠口で行うものだった。

【副会長】 昔は松明まわしが行われると、街道が火の海のようなになったと聞いた。

【委員】 その通りで、進駐軍のジープが交通事故を起こして、それから小川寺でやるように

なった。

【会 長】 小川寺にまとまったということになると、檀家さん以外はどうしたのか。

【事務局】 小川寺で回しているのは檀家の役員さんだが、昔は小川寺の檀家さんたちが各家でまわしていたという理解でしょうか。

【委 員】 その通り。

【会 長】 いろいろな家で行っていたということは小川寺の檀家さん以外もいたのではない
か。道沿いでやっていたということは、全員が小川寺の檀家さんだったわけではない
と思うが。

【委 員】 小川の辺りは全員が小川寺の檀家だった。

【会 長】 そこから語らないといけない。

【副会長】 奥に住んでいる人は青梅街道まで出てきていたと聞いた。

【委 員】 各家庭で回していたのが、火事にも間違えられるなどもあるし、小麦も手に入ら
なくなってきただろうということから、代表で行い種火を取りに行くという形に変わ
っていったのではないかと思われる。

【副会長】 回す人はだれでも参加できるようになっていると聞いていた。集まる日があり藁が
配られてその場で作っていた。

【委 員】 藁も手に入りにくくなって、麦の背も低くなっている。その結果檀家さんが中心に
なったということなのだろう。

【事務局】 視察当日は雨が降っていたので、初めは人が集っていなかったのですが、その後
徐々に人が集まりだしました。もともと6時半開始だったのですが、20分から始まっ
たので、まだ集まり切れていなかったようです。そのため私たちも回させてもらえま
した。

【副会長】 以前見たときは視察当日の時の人数よりももっといっぱい集まっていた。鈴木遺跡
の発掘現場には小川町のあたりから来ている方がたくさんいて、松明まわしの話を聞
いた。

【委 員】 33年位住んでいるが、はじめて見に行った。とても印象的だったが、集まった皆さ
んたちがよりどころになっていること、またみんな見知った間柄であり、それだけ地
域に根付いた文化なのだなと思われた。そういう地域として大事な行事であるだと感
じた。

【副会長】 小平十四小学校の校区内の知り合いの方の家に、松明まわしの当に日お邪魔したこ
とがあるのだが、近所の方が集まって午前中から飲食して、時間を待ち朝から楽しん
で始まる時間を待ち、子どもたちは浴衣に着替えて、提灯を持っていく。一日がかり
の行事で皆さんが楽しんでいた。

【委 員】 皆さんにそう感じていただけで良かった。

【委 員】 やはり文化財として指定するのにふさわしい伝統行事とを感じる。

【副会長】 食べるものもお仏壇にあがっているものを下げていただいていた。

【委 員】 仏さまに上げたものと同じものをいただくということが大事で、贅沢なものである
ことよりも同じものをいただくということが重要だと考えていた。

- 【副会長】 高齢の方がいらっしゃる家だったので、そういうものが残っていたのだと思う。委員がおっしゃっていたように調べるともっと膨らむ話になるだろう。
- 【委員】 根付いている様子も大事だ。読経から始まって松明をまわし、帰って行くという一連の流れが大事だが、どのようにまとめるのかということが課題だろう。
- 【委員】 町方にいけばこのような行事は残っていない。
- 【委員】 一般的に墓じまいが進んで、檀家さんが減っているなどとも言われているから、文化的なものが失われる可能性が高まっている。檀家数は減っているのだろうか。
- 【委員】 墓じまいというと、小川町の辺りはまだお墓をだれが継ぐかということがあるので継承者がいなくなるということが少ない地域ではある。それでも、無縁仏という管理する人がいなくなってしまう墓石が75個あった。
- 【委員】 増えているということか。
- 【委員】 昔は2・3基しかなかった。また物乞いの方が来て、行き倒れて無縁仏としてお寺の敷地内にそういう方を葬っていたが、それと合わせても10基くらいで昔からきていた。中には戦没者を追悼した石碑なども混じっていた。そういうものも含めて保存して残していければ良い。
- 【事務局】 地域の行事として、歴史的時系列の中の位置づけという問題もありますが、もう一つ、周辺地域の中での位置づけという問題もあります。
- 東京都の無形文化財担当者にも問い合わせたところ、やはり小川と西砂地域のものしか把握していない、とのことでした。
- 先週多摩地域の文化財職員が集まる会議があり、その場所で同様の事例が無いか尋ねてみました。本会議で話題に挙がっていた立川市の西砂地域しかないことが分かりました。
- その後、より正確な情報をいただいた中では、昭和の頃には五日市街道中心に行われていた行事だったという話もあります。小川の辺りなので青梅街道とは違うわけですが。武蔵村山市の岸、羽村市の中里、昭島市の宮沢、瑞穂町の殿ヶ谷、国分寺市の中藤にあったようです。その後だんだんと無くなっていき小川と西砂地域が残っているという状況です。
- 岸は小川村の小川九郎兵衛の出身地で、砂川村も同じような関係です。岸、中里、宮沢は狭山丘陵の南側の村です。国分寺の中藤だけ飛んでいますが、これは武蔵村山市の中藤村出身者が開発した新田ですので、基本的には狭山丘陵の南側にあった村々とその出身者によって開発された新田にあった習慣と考えられます。さらに武蔵村山市の民俗という本の中でもそのような行事が行われていたという記述はありますが、お盆の時期は麦の収穫時期でもあるので、麦わらがあるのでそれを松明の材料にしている、子どもたちはその付け根に紐をつけてぐるぐるまわした。あちこちからバチバチという音が聞こえた。麦を作らなくなってから陸稲の藁で作っていたということ、原料が手に入らなくなると変わるということもあります。これは中藤の記述で、子どもがやっていたということのようです。
- 小川村にとっては母村である岸村やその周辺で行われていた行事と考えてよさそう

です。

【委員】 今言った自治体では、松明まわしに文化財指定しようという声はないのか。

【事務局】 立川市以外では残っていないので、そのようにはなっていないようです。また立川市の情報によれば昭和までは残っていたようです。また立川市では松明まわし保存会が活動していて、立川市から補助金を出して、年に1度は実施してもらい維持していくようにしているとのこと。

【委員】 昭島市の宮沢の辺りには無いか。

【事務局】 現時点ではその情報を得られていません。

【委員】 現在種火を持って帰るといって残っているのは小平のみということか。

【事務局】 少し変容していますが、その精神性は継承されているということだと思います。

【委員】 なおさら貴重だと思う。

【事務局】 西砂ではお盆の行事としてはやっておらず、松明をまわす、というところだけ伝わっています。立川市では、毎年8月に行われる「よいとまつり」で、立川市長が多摩モノレールの橋脚の下で回しています。

【委員】 松明を回す、お盆の行事としてというのは他にはなさそう。

【事務局】 お盆の行事としてはここだけかもしれません。

【事務局】 現在調べたところではここだけになっています。無いということを証明することは大変難しいです。まったく違う形の松明、トーチ上の巨大な松明を回すという行事は日本中でみると他の地域にもあるようですが、縄につけた松明を回すという行事は小川と西砂地域しか無いようです。

【事務局】 他と比較してみると、お盆はどこでも行われていますが、松明まわしということピックアップすると、貴重な信仰行事であると言えそうなところまではおぼろげながら見えてきます。

羽村市とか昭島市とか国分寺市の民俗記録も探してみればより分かるかというような気がします。たまたま武蔵村山市の民俗記録資料を持っていたので、調べたところ記載があった。しかし、瑞穂町の民俗記録にはやっていたという記載はない。これらは、立川市文化財担当からの情報を提供していただいているのですが。

【委員】 今あげた市のお寺に問い合わせしてみてもどうだろうか。それが一番良さそう。

【事務局】 他市との比較で、そのような状況が分かってきました。

【会長】 前回と今回の会議でもいろいろ見えてきた。今の話からどの時点から始まったということ、追い出しのお経から松明まわしをして提灯に入れ、三々五々各家庭でお盆を行うということ。また松明まわしは武蔵村山市の辺りから発祥して、小川村に伝わっていったということなども。

【事務局】 小川村・砂川村から始まったのか、狭山丘陵の南で始まったのかということはこれらの資料からは分からないが、村落の発生からの流れを考えると、基本的には小川村も砂川村も岸の豪農、名主をやっていたような層が、小川や砂川を新田開発している。

狭山丘陵の南の村々は中世から続く歴史的な村落で、小川や砂川は江戸時代に入っ

てから開発されて開かれたことを考えると、そういう伝播の流れの方が自然かと思われませんが、厳密に言えば、もう少し確実な証拠が欲しいところではあります。

【会 長】 厳密に言えばもう少し証拠が欲しいということは、小川寺から史料が出てこないということか。

【事務局】 証言でも良いです。地域の古老からは、よくあのお寺の住職とかあそこのお寺は今うちよりでかくて、偉そうだけれども、実のほうのうちの方が起源が古いんだとか、そういう話を聞くことがあります。古文書の方が確実だと思いますが。

文化財指定という視点で言うと、ここまで調べられていれば、松明まわしは文化財に指定できると思います。ただしそれは、お盆という行事の中で松明まわしという行事だけを切り取って指定するということなのです。事務的には指定はできます。

もう少しお盆行事の中での松明まわしの位置づけをはっきりさせてから指定すべきという考え方のほうが、文化財の価値を明らかにするという点ではより適切な対応だと思います。

【副会長】 今年度中に、指定になれば良いと考えているのですが、その予定はどうだろうか。

【事務局】 それはスケジュール的に厳しいです。

文化財の指定のためには文化財保護審議会で2回審議する必要があります。まず教育委員会から、指定したい文化財があるので文化財保護審議会に伺いますという諮問が入らないといけない。諮問が入って、文化財保護審議会では会議で本日の審議会のような検討を行って、指定が望ましいという答申を出します。

答申を出すためには、事務局の答申案が良いですかということを確認していただく必要があります。本日の審議会は今年度の3回目なので、今年度はタイムスケジュール的にはできません。

【副会長】 次回出てきますか。

【事務局】 次回答申を出すには、委員があげられていたことを調査してからということになります。

【副会長】 松明まわしの話が出てからもう1年が経っているが、もう少し進展を早める方法はないか。

【委 員】 いつ頃からという話が出たが、小川寺は100年前と250年前の2回火災で古い史料が燃えてしまっている。史料が残っていれば、話を聞いていると簡単にいきそうだが、証拠が無くてそうらしいため困る。

昔のことで火災が発生すると全て失われている。冒頭からやっていたようだが。

【委 員】 鈴木遺跡の場合は考古学の有識者の意見をもらって、価値づけが可能ですが、今の話題について、こういう分野の方はどのような方がいるのか。有識者とか体系的に組み立てる論理を組み立てることについて知恵を貸していただく方とは。

【事務局】 民俗学を専門にしている大学教授やそれをやられていた方です。委員がおっしゃっていることは、文化財の価値を適切に理解する上で、その通りかと思います。鈴木遺跡の国史跡化の際にも考古学の専門の先生から意見をうかがうことをしています。

【委 員】 するとまだまだ議論するには時間もないということか。

【事務局】 残された次の回までの時間を考えると、どちらにしてもすぐにやるということにはなりません。来年度にはやるということになります。

【会長】 来年度に指定を目指すにしても、更にどの部分についての調査が必要になるのか、どのような資料が必要になるのか、そういうことがはっきりしないと、議論が空転するばかりなので、どこに問題があるのかきっちりさせる必要がある。今までの議論の中で、地域の中で、この行事というか習慣は非常に貴重であることはそう外れた話ではないかというように理解している。

単に小平にポツンとあるのではなくて、都市化や社会の変容によって残っているのは小平のみで、西砂地域については変容してしまっている。当初の習慣を伝えているとは言いにくくなっているが、小平の松明まわしについては、唯一ももとの状況を残していると言えるのではないかと。そういう点で希少なもので、早く保存をする必要があるということについては、コンセンサスを得られるのではないかと。

保存する必要があるのだけれども、指定するのだという場合に、足りない根拠は何かということについて洗い出しておかないと、例えば、委員が指摘されたとおり、盆行事の中でどの位置にあるのかということについて考えるならば、盆行事の中でと考えるならば、小平の盆行事の流れを次に回までに洗い出しておくことで、盆行事も無くなりつつあるのだけれども、このことについては残っているのだということをやんと言えらることで、行事としての大事だが明らかになる。

そこまでの筋道をつけて決めないと、時間ももったいない。委員が心配しているのもそういうことではないかと理解している。本来は盆行事全体が大事だが、その中でしっかり残っているのが松明まわしなのだという言い方ができるのではないかと。一日の流れについては時系列にあわせて並べて、あるいは必要があれば、檀家さんの所についてどのように組み立てているのかということも含めて話を聞いてみる。檀家さんに行事として進めているのかということを確認すれば、小平でのあり方がこうだったということになる。

資料という点では、民俗編について有るか無いかを悉皆的に見ていくことで分かる。小平での盆行事という点では、行事としてはこういうものとして、その中で松明まわしのできるいきさつが見えてくるのではないかと。お忙しいならこういうことについて調べて欲しいとか、事務局でも役割分担していただくとか、道筋を立てていければ良い。現場に行けなくて大変申し訳なかったが、写真から松明まわしというのはかなり豪快に回しているのがよく分かった。確かに家に戻ってからどうなるのかとか、そのあたりについてははっきりすると良い。お寺としての行事と各家での行事が見えてくると変わってくるかと思う。松明まわしの指定については、反対意見は無いけれども、詳細に調査した方が良いというご意見はあったので、それはおさえていきたい。後から思いつかれたことがあれば、事務局に連絡して欲しい。そして指定を目指すということにしたいと思う。

委員各位はどのように考えるか。

【各委員】 同意する。

- 【会 長】 指定のためなら自分が直接ご住職に挨拶に伺ってもよいし、檀家さんにお話を伺いに行っても良い。
- 【事務局】 関係者は地域の名士でもあり、ご挨拶に行った方がよいと思います。
- 【副会長】 小川寺は指定の候補にされていることについてご存じなのか。またどのようにお考えになるだろうか。
- 【事務局】 まだご存じない状態です。会長が今おっしゃった通り、松明まわしの位置づけを整理するため、盆行事の一連の流れを見直すということ、他市の事例を確認するために民俗編を見ていくことなどについて、これができれば事務局的には問題はないかと思っています。
- 盆行事全体の流れを見る上では、当事者の方から聞くのが一番なのですが、小川寺の檀家でもある委員に伺えればと思います。
- 【委 員】 小川寺の檀家には私の上の世代の人はいないのです。気が付いたらいなくなっちゃった。施設に入られていたりして。
- 【事務局】 委員は今もお盆行事をやられていると思いますので、現在の行事实施状況についてお話いただいて、話していただいたことをまとめれば十分な資料になります。
- 松明まわしは、ほかの文化資源候補と比べれば、文化財指定するのにハードルが低いと思います。
- 【会 長】 担い手がどの程度いるのか。
- 【事務局】 委員にご同行いただければと思います。
- 【委 員】 同行いたします。現在のご住職の親世代と私が同じ位の世代なのですが、現在も続けているのでよく分かっているはずですが。
- 【事務局】 小川寺に伺ってこういう状況で、声が上がっているのですが、いかがでしょうかということ。もしお寺さんに断られてしまえばそれで終わりなので。
- 【副会長】 この話が出てからかなりの回を費やしていることなので、進展すると良い。
- 【事務局】 そもそもですが、松明まわしの関係者から文化財指定への同意がいただければ、いくら調査しても文化財指定にはできないです。
- 【会 長】 断る理由は無いように思うが。
- 【副会長】 そうだ。
- 【事務局】 都の担当者がほかの松明まわしの事例を聞いたことが無いと証言していることは大きいことかもしれません。地域的にかなり限定される行事なのではないかと思う。
- 【副会長】 議員さんが議会で上げられるくらいの興味を持っているものなので、文化財保護審議員としては注目したい。
- 【事務局】 東京都が注目して、都の指定文化財にしますということにもなりうるかもしれない。
- 【会 長】 ここまで頑張っておいて。
- 【副会長】 是非あたっていただければと思います。
- 【事務局】 まずは事務局と委員で話に行ってみるとよいかと思っています。前向きな回答いただければ、会長がおっしゃっている、盆行事について委員に語っていただいたり、他市事

例について調べたり、すればよいのではないのでしょうか。

【委員】 そのとおりだ。

【会長】 確かに一生懸命に調べて、最後にお寺に断られるだろうか。

【副会長】 たくさん人が来ていやだということはあるかもしれない。だが、指定されるということは名誉だと思うのではないか。

【事務局】 お寺さんだけではなく、檀家さんや檀家総代の方々のご意見も重要だと思います。

【委員】 現在のご住職と檀家総代は仲が良いです。

【事務局】 松明まわしはその行事の維持が大変で容易じゃないというように当事者の皆様が考えていると、文化財指定を断られるということもあります。

【委員】 少し下話をしておきます。

【事務局】 それから事務局が関係者の皆様にお話をいたします。

【委員】 それならば、会長にも行っていただいた方がよいのではないか。

【事務局】 会長が行かれると重みが違います。

【会長】 承知いたしました。同行いたします。事務局には日程調整などについてお願いします。当事者にある意味通知というか調査対象としているということをお話してもよいと思います。それで同意を得られたところで着々と進めるということとしたい。

鈴木ばやし初代底抜け屋台について

【会長】 次は鈴木ばやしの屋台の件について。

【事務局】 これは鈴木ばやしの初代の底抜け屋台についてです。部材については鈴木民具庫でみていただきましたが、組み立てるとこのような形になります。部材の中にも棟札ではないが、いつ作りいつ修理したのかということが書かれており、これを見ると製作1877年、1985年修復と書かれています。明治が1868年ですから、明治維新が起きてから10年後くらいにつくられたものです。鈴木ばやしは初め、この屋台しか持っていませんでした。

周辺で同じ時期で見回してみますと、江戸時代末期から明治時代初め頃、裕福な村は山車を江戸で購入しています。他の地域の言い伝えですと、江戸で山車を購入し、夜通し引っ張って自分の村まで持ってきたという話をよく聞きます。

鈴木ばやしの関係者の談話では、小平市域は新田開発で開墾されて開かれた村のため、地味が豊かでなく、そのため周辺に比べると経済的に余裕がなく、こういう屋台しか作れなかった。もうこの屋台は使わなくなったのだけれども、鈴木ばやしを語る上では欠かせないものとして、良かったら市で保管してもらえないか、寄贈しますと申し出があり、市で受け入れました。これもある意味地域性を示しているものです。

この屋台にはこれは床板がありません。紅白幕の中に床板が無いので、中に立って演奏します。演奏している写真がありますが、足元が紅白幕で覆われているので分かりづらいのですが、立っているのです。

【委員】 ということは歩きながら演奏できるのか。

【事務局】 屋台を引っ張る人と演奏する人が同じ速さで動かなくてはならない。太鼓は鼓笛隊

のように自分についているわけではなく、底抜け屋台についているので、ペースが合わないと思います。

【委員】 それは難しい、持ってきて演奏するものなのだろう。

【副会長】 車輪はどうなっていたのか。

【事務局】 あります。

【会長】 それは場所を移動するためのものということか。

【事務局】 山車の目的は地域の疫病神を払う、御神徳を広めてまわるといいうものなので、引っ張って演奏はしているはず。

【委員】 この写真はいつ撮ったものなのか。

【事務局】 この写真は2年位前のもので、寄贈する際に鈴木ばやしの関係者の皆様が、最後にもう一度組み立ててみようということで、ふるさと村の神山家の前庭のところで組み立てた時の写真です。

【副会長】 この時に車輪はつけていないのですか。

【事務局】 4輪全部つけていました。演奏しているときには車輪は外しているはずですが。安定しないのではないのでしょうか。

【副会長】 動いて演奏するときだけ車輪を付ける。移動しながら演奏するときだけつけたということか。

【会長】 やはり移動しながら演奏したのではないか。

【事務局】 引っ張る人と演奏する人の歩調が合わないと思います。

【委員】 小平市内でこれは1基残っているのか。屋根からまるまるのこっているのか。

【事務局】 屋根は寄贈されていません。鈴木ばやしには2代目の底抜け屋台もあり、屋根は初代からのものを使いまわしているため寄贈を受けていません。

【会長】 正面の棟のところはどうしたのか。

【委員】 鬼木と呼ぶのだろと思うが、「げぎょ」とが付いている。

【副会長】 ここまでいただいているのに屋根は貰っていないのか。

【事務局】 屋根はふすまにビニールを貼ってあるようなものだったので。

【委員】 これはポリカーボネートの屋根に見える。

【事務局】 屋根があればよかったのでしょけれども、それは寄贈されませんでした。

【委員】 他に無いような山車に見えるが。

【事務局】 近隣事例をあげますと、飯能市の屋台は、皆底抜け屋台です。山車ではない。飯能は底抜け屋台ばかりです。ネットで調べていただくとたくさん検索できます。各地区で。飯能のお祭りは、詳しくは存じ上げないのですが。

【会長】 東京で珍しいとかは。

【事務局】 そんなことはありません。大きな山車と持っている所でも、山車一台ではなくて、大きな太鼓などを載せて叩きながら移動するようなそういうようなものがあり、その後ろについてくるものとして底抜け屋台が使われていることはあるため、珍しいものではない。鈴木ばやしの地域性を考えると、山車が買えるほど財力が無い頃に、この屋台で伝統芸能を繋いできたというところに意義がある。

- 【委員】 やはり鈴木ばやしの方が意義があるということか。
- 【会長】 鈴木ばやしが無形民俗で文化財指定されているので、1887年ということから年代も明らかになっていることから指定に値すると考えて良いのでは。
- 【事務局】 鈴木ばやしに関連するものとしては非常に重要だと思います。
- 【会長】 鈴木ばやし指定されているので、底抜け屋台も指定たりうと思う。
- 【副会長】 これも指定するには答申などの流れになっていくのか。
- 【事務局】 周辺事例を調べる必要がある。単体でも価値という意味ではあるが、飯能などもあり、底抜け屋台がどういう風に祭りの中で使われているかとか。
- 【会長】 製作年が明らかであることが、とても重要だと思う。こういうものだから残ったのではないだろうか。もっとがっしりしたものであれば、壊されていたかもしれない。
- 【事務局】 飯能の屋台がどのくらいの時期のものなのかとか、調べて比較することができれば価値が明らかになると思う。飯能は底抜け屋台の一つの中心地なので、飯能にはもっと豪華な底抜け屋台がいっぱいある。
- 【会長】 松明まわしが武蔵村山の岸からということを見ると、鈴木ばやしはどこから伝播したのか。
- 【事務局】 松明まわしは小平市東部では聞かない。小平市の西部の小川村が中心です。そしてその小川村のルーツは武蔵村山市の岸です。
- 鈴木ばやしは小平市東部の鈴木新田を中心としています。はやしは街道を通じて伝播する傾向がみられると思います。青梅街道は江戸と青梅を結ぶ道路ですが、街道途中の小平市域の鈴木ばやしや、青梅市に今も伝わるはやしも、皆江戸ばやしです。
- 逆に狭山丘陵南麓の武蔵村山の辺りは、所沢の古谷重松（ふるやじゅうま）という人が編み出した重松（じゅうま）ばやしというのが多い。重松ばやしは西多摩の狭山丘陵の南麓や昭島・あきる野に広がっている。内容が少し違う。
- 【副会長】 鈴木ばやしは、鈴木新田の深谷さんが江戸まで行って、若者に娯楽が無いから学んできて広めたと聞いている。伝播というよりは直接学んだとい聞いている。
- 【事務局】 それで良いと思います。
- 【副会長】 伝播より直接学んできたという違いがある。
- 【事務局】 深谷さんも江戸ではやしを学んできたのですが、それを自身でアレンジしていた。そしてその編み出した旋律を、行商しながら各地に伝えたとされている。
- 【委員】 行商の人がいろいろなニュースだけでなく、いろいろと伝えている。
- 【事務局】 昔は小川地区にも小川何番というおはやしがあったという記録はあるのですが、みんな絶えてしまって、残っているのは鈴木ばやしだけです。
- 【委員】 四番に余組ばやしというのをやっていたのです。変体ひらがなの「余」でした。あれも武蔵村山の方から習ってきている。
- 【事務局】 重松ばやしだった。殿ヶ谷とか瑞穂町のあたりは重松ばやしで、殿ヶ谷からならつたと市史には書いてある。戦後に習ったらしいのですけど。
- 【委員】 それは聞けば分かるものなのですかね。
- 【事務局】 多分分かるひとには分かる、演奏ペースが違ったりすると聞いている。

- 【委員】 笛や太鼓など使うものは同じなのか。
- 【事務局】 使うものは同じでも、ペースが違い、重松ばやしはジャズなどのようにアレンジな
どが多いそうです。
- 【委員】 おはやしと一言と言っても多様性がある。
- 【副会長】 演奏でいうと神明宮が灯り灯ろうの大きいものを並べる行事があるが。
- 【委員】 まんどうです。
- 【副会長】 その時の演奏も凄いものがある。
- 【委員】 あれは凄い。
- 【委員】 若干小規模になっているが、行われている。
- 【副会長】 10年以上前にはすごいお客さんが来ていた。どのように書くのか。
- 【委員】 数字の万に灯りで万灯だ。
- 【副会長】 何基も出ていたが。
- 【委員】 9基出ていた。小川が1番から8番まであり小川の駅のあたりで、
- 【委員】 秋祭りか。
- 【委員】 4月だ。4月3日だったが。
- 【副会長】 何にかけたお祭りか。
- 【委員】 神明社の末社の八雲社の神様を祭るお祭りで、月末29日にやっている。
- 【委員】 農作物の春の祈願だろうか。秋はお疲れ様でしたというお祭りになるが。
- 【委員】 感謝のお祭りだろう。
- 【委員】 鈴木ばやしは市の文化財に指定されているということは、代々お年寄りから引き継
がれて、教えているひとが健在なのか。
- 【副会長】 保存会の方が常に会員を募集してやっている。一時鈴木小学校に教えに来てもらっ
ていたが、何人か入るが中学校・高校生になると部活が忙しくてやめてしまう。
- 【委員】 こういうものは無くなる傾向がある。柳窪ばやしは、見学会ごとにやっていたが教
える人もいない。小学生も入ってこない。
- 【副会長】 かつては公民館でやっていたが無くなってしまい、神社の中にある練習所で続い
ている。
- 【委員】 鈴木ばやしは無形の民俗文化財としては文化財指定されているので、これをどうす
るのかといかということは後から作っても良いものなので、そこまではと私は思う。
- 【会長】 底抜け屋台の場合は有形民俗文化財か。
- 【事務局】 この場合は有形民俗文化財です。単体での指定になる。
- 【副会長】 指定はされていなくても、民具庫の中で貴重なものとして保存していかれるから大
丈夫。あまり指定しなくてもよいということか。
- 【会長】 指定されるならば有形民俗文化財ということになる。
- 【事務局】 文化財の分類カテゴリーの問題です。
- 【委員】 指定されているので、途絶えることは無いと思うと、こういうのは新しくなっても
良いだろう。そんなに長持ちするものではなく、材料一つとっても細かいし、もっと立
派なものだったら違うだろうが。大事にとっておけば残るものだろうが。

【会 長】 情報提供していただき、私は将来的に有形民俗文化財に指定してもよいかと思う。飯能の事例や殿ヶ谷の事例などを調べた方がということであれば、せつかくなので指定されると、そうそう活用しにくくなると思うので、ふるさと村で活用してもらい周知を図ってもよい。ただずっと眠っているよりは。

【委 員】 鈴木ばやしの由来の神社というのはどこになるのか。

【事務局】 鈴木ばやしは何神社というのはあまり無いように思います。ただ、鈴木ばやしを創設した人たちは、周辺の囃子連を含めて合同で、鈴木稲荷神社の手洗い鉢を奉納しています。

鈴木稲荷神社の手水鉢は寄進されたものなのですが、鈴木ばやしの人たちが中心となっている。それがあるのは鈴木稲荷神社で、創始者は鈴木新田の深谷さんなので、その人が寄進したのは鈴木稲荷神社。中心になっていたのは鈴木新田で、産土（うぶすな）と考えていただいてよいかと思います。今みなさんはあのあたりを中心に活動しているわけではなく、練習所がある武蔵野神社に集まる傾向があります。ただいろいろな神社の祭礼に参加しています。市内で唯一のおはやしなので。底抜け屋台は指定のカテゴリーとしては有形民俗文化財でよいと思います。

立川家の筆子塚について

【委 員】 小平郷土研究会の刊行した『小平の屋号』見てもらおうと、私の家は「テラコヤ」となっている。1775年、安永4年という年に初めて小川村で寺子屋を始めたと言われている。ちょうどいまから250年前になる。90年3代やっていた。うちのあたりは小平第一小学校なのですが、それにつながっている。明治5年に新しい学制がしかれて、第一小学校はその翌年明治6年に開校している。この小川という集落は昔は食うや食わずで大変だったが、教育に関しての助走は比較的早くに初めているように感じ、ひそかに誇りにしている。実は私の家の3代の先祖が亡くなった時に、その顕彰碑として寺子屋の弟子が筆子中という墓石を建ててくれた。それぞれ3基、小川寺に建てられている。

【事務局】 小川寺にですか。

【委 員】 畳3畳くらいのささやかな墓地ですがそこに3基建ってもらっている。これが今どきの墓石ですと石の質が良いのでずっと残るが、古いものなので風雨に曝されて文字が削れてしまう。一番尊いと考えている筆子中という文字もだんだん削れてきているので、10年ほど前に拓本をとって保存しているが、コロナの前に7・8年前の秋に小平郷土研究会の発表会で拓本を大勢の人に見てもらった。石で作ってもらったが性質が風化しやすい石なので、指定というと大げさなので、何かの形でこういう石碑なのだということを残したいと考えている。推薦って書いてあるのに勇気を得て申し出た。大げさな形でなくて良いので、指定のような文字をいただけたらと思う。『小平ふるさと物語（三）』の5、6ページに書いてある、12・3年前のインタビュー記事なので誤謬がありましたらご容赦いただき、暇を見つけてみていただければと思う。

【事務局】 お話いただいてから、小平市では石造物の悉皆調査をやっているのだから載って

いるか見たのですが、載っていませんでした。筆子塚というのは、小平市史には市内には何基あって、そのうち一基が委員の筆子塚なのですがけれども、掲載されていないので、同じことで申し訳ないのですが、どのくらいの大きさで、現状どういう状態で、どのようなことが書いてあるのかということ把握することから始める必要があります。

筆子塚を文化財に指定しているところについて、稲城市に奚疑塾（けいぎじゅく）という明治13年から大正2年まで、当時子どもたちは、尋常小学校を出ると、農家の子どもたちはそのまま働くことになるのですけれども、裕福な家の子どもは私塾にはいり勉強します。奚疑塾というのは難しい字なのですが、陶淵明の中国の古代の詩人で、帰去来の辞という漢詩文があるのですが、その中からとった「けいぎ」という言葉に由来します。多摩地区の有名な政治家とか地域の有力者の子どもはそこに行って、学問を修めたということが多いのです。稲城市は昔の私塾について熱心に研究していて、筆子塚が3件、市指定の文化財になっています。こういった事例があるので、比較していくと価値がはっきりしてくるかなと思います。

- 【委員】 わが家が寺子屋を始めたのは早かったようだ。明治からは盛んになったようでもあるが、その100年前になる。
- 【副会長】 より貴重なものだ。
- 【委員】 石の質が良くないため傷んでいる。傘が大きく一基160cmくらい。このままほっておくと、石碑に何が書いてあるのか分からなくなってしまう。
- 【事務局】 スマホで写真を撮っていただくとよいかと。
- 【委員】 事務局に見てもらう必要がある。
- 【事務局】 筆子塚の一番最初のものについては、市史にも掲載されている。それがどこにあるかということは書かれていません。おそらく、個人のお墓にあるため掲載しなかったのではないのでしょうか。
- 【副会長】 一番古いのは何年頃か。
- 【事務局】 一番古いものは最初の方が亡くなったのが天保4年1838年のようです。石材の傷みが進んでいるようであれば3Dデータを残しておくよいかと思います。剥離が起きて見えなくなったときにも一応確認はできます。拓本を撮ることも大事だとは思いますが。国分寺市でも川崎平右衛門の謝恩塔で修理前後のデータを残すことで、見えなくなったところなども情報を残しています。
- 【委員】 立川家先祖の3代目の人が始めたと聞いている。
- 【会長】 小平の寺小屋は古いと聞いたが。
- 【事務局】 意外なことが分かることがあります。寺子屋の受講者名簿が残っていて、女子の受講者が多かったことが分かっています。
- 【副会長】 三小の小学校になる前の形、古い学校の写真を見せてもらったところ、女子がたくさん写っていた。三小の前に学校があった。
- 【委員】 そして津田塾大学につながっていったのかもしれない。
- 【事務局】 勉強しておきます。

- 【会 長】 小川寺に挨拶に行くときに、合わせて確認をすると。
- 【委 員】 たいてい大丈夫だ。
- 【副会長】 小川寺に行くときに同じ時に確認して、3D 記録も同時に取るなどすればよい。
- 【会 長】 一番古いということであれば。
- 【事務局】 それも比較してみる必要があります。

5 その他

- 【副会長】 市報こだいら令和 6 年 10 月 1 日号の鈴木遺跡の特集記事がすごくよかったので、いろいろな人に見せている。
- 【会 長】 誰が書いたのか。
- 【事務局】 広報担当と作成しました。市報で初めて漫画調にしたということでした。

〈次回は令和 7 年 2 月 14 日（金）を候補日とし散会〉

（会議終了後、小平市役所本庁 1 階ロビー内で実施していた鈴木遺跡発掘 50 周年記念パネル展示の委員視察を実施）